國學院大學学術情報リポジトリ

藤澤親雄の形而上学的地政学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-05 キーワード (Ja): 古神道, 藤澤親雄, 地政学, 終末思想, 国際秩序 キーワード (En): 作成者: シッケタンツ,エリック, Erik,Schicketanz メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000015

藤澤親雄の形而上学的地政学

エリック・シッケタンツ

一、序論

本論文は藤澤親雄（一八九三～一九六二）というエキセントリックな思想家に注目する。藤澤は国際連盟に憧れる進歩的な国際主義者として出発したにもかかわらず、一九二〇年代後半以降徐々に右傾化し、ソ連の成立と共産主義の拡大を深く警戒しながら西洋哲学を論破しようとして非常に独自の日本主義思想を展開し、天皇を中心とした世界秩序を説いたことで知られている。

戦前・戦中期、日本の思想家たちはさまざまな観点から、支配的な主権国家に構成される国際秩序に挑戦を唱えた。[1] その中で、三木清や蝋山政道の東亜共同体論がもっとも有名であろう。そのいずれも、東方文化や東洋の精神文明を掲げていたが、その基礎は世俗的な構想であった。宗教的な国際秩序構想として、日蓮主義にもとづく石原莞爾の地政学的な考察がもっとも有名であるが、[2] 唯一の宗教的な秩序構想ではなかった。藤澤親雄が思い描いた国際秩序は神道をその中心としたものであり、一九三〇・四〇年代、アジアで発生した戦争を神話的宗教的なレンズを通して理解しようとした。石原莞爾に関するものを別

として、従来の研究では、戦時下の宗教的な秩序のヴィジョンに対する注目は十分ではない。著者の進行中の研究プロジェクトは特に日中戦争における宗教的な次元を発掘しようとしている。占領下の中国北部におけるプロパガンダ工作に深く参加した藤澤親雄はこの観点から重要な材料だと思われる。

藤澤の出版物は非常に数多く、一つの論文で簡単にまとめることができない。それゆえ、本論文は先行研究を踏まえて、藤澤の思想形成に焦点を当てながら、彼が展開した思想の特徴を考察する試論的なものである。以下では、特に彼の思想に形成的な影響を与えた要素に注目したい。

二、藤澤親雄の生涯

藤澤は一八九三年、数学者藤澤利喜太郎（一八六一～一九三三）の長男として東京で生まれる。一九一七年、彼は東京帝国大学法学部仏法科を卒業し、農商務省に入る。一九一九年、元満鉄総裁松岡均平男爵に随行しジェネーヴ国際連盟に出席した。この機に藤澤は新渡戸稲造と知り合い、国際連盟に事務局員として就任した。一九二二年、藤澤は文部省在外研究員としてベルリン大学で留学を開始し、政治哲学を学び、翌年同大学より博士号を授かり帰国する。一九二五年、藤澤は九州帝国大学文学部で教鞭をとり、政治史と外交史を教える。一九三一年、九州帝国大学を辞任し、外務省文化事業部の留学生として中国へ派遣され、北京大学を中心として東洋政治学を学ぶ。一九三三年に帰国し、翌年から文部省国民精神文化研究所所員となる。一九三五年、大東文化学院で教授となる。戦時中は大政翼賛会東亜局長の任に務いた。[3]日中戦争が勃発すると、中国における思想工作に参加する。一九三八年、藤澤は文部省が開催した東亜文化振興協議会に参加し、[4]これをきっかけとして中国北部の対日協力政権の新民会中央指導部の部員となり、幾度も中国北部を訪れる。[5]一九四三年から陸軍省の嘱託により中国北部に渡り中国人の教化事業を行い、大陸で敗戦を迎える。戦後、日本文化連合会など文化団体を結成し、日本文化の海外普及に努める。一九六一年、国士舘大学で教授となるが、翌年の七月に六十九歳で急逝した。[6]

藤澤は生涯を通して非常に活発な執筆活動を行い、日本語、ドイツ語、英語などで多数の論文と書籍を残している。以上の略歴からわかるように、藤澤の活動は学問のみならず、広く文化や政治の領域に及んでいたが、彼の著作は主に思想を展開す

るものであり、政治活動に関する詳細な情報は得がたい。[7]

三、先行研究

ファシズムに対する関心と極端な天皇主義のため、藤澤親雄は戦後批判的な注目を受けており、戦前戦時中体制側の「御用学者」として位置付けられている。[8] 戦時中の右派においても彼の日本主義思想は「ユダヤ的史観の模写にすぎぬ」「救世主再臨的史観」として異端視されていた。[9]

藤澤に関する先行研究は決して数多くない。特に彼の思想を体系的に考察している長編の研究はまだ存在しない。欧米では、藤澤は主にファシズムや大東亜共栄圏構想との関係、または日本における地政学の成立の関連で取り上げられている。[10] 日本語の先行研究では、二つの主なアプローチがあるといえる。一つは藤澤の国体思想と皇道思想に注目するものであり、もう一つは藤澤の政治思想に注目し、特に彼の日本主義への「回帰」という問題に言及している。この二つのアプローチを代表するのは、上西亘と中井悠貴の研究で、以下では両氏の議論をまとめてみる。[11]

上西亘は国体思想に注目するアプローチを代表する。彼は主に日本主義傾向が顕著になった一九三〇年代以降の著作に注目し、藤澤を「異色の神道人」と特徴づけている。藤澤は江戸末期・明治初期の国学者大國隆正（一七九三～一八七一）の影響を受けたと指摘し、藤澤の日本主義への「回帰」の原因を「国際連盟の内実として、英米の自由主義を物差しとした偽りの平和に過ぎず、独善的な世界主義を唱へるマルクス主義と同様、世界を真の平和へと導く存在でない」という痛感に見出す。国際連盟に挫折した藤澤が日中戦争勃発前後から世界平和をもたらす使命を日本に期待するようになったとする。この使命を裏付ける日本国体の普遍性を主張するために、日本を世界の祖国として位置付ける必要が生じ、ついに非正統な「偽書」の文献（「竹内文書」）を参照することにいたった。[12] また、藤澤が戦後になっても日本が人類を教導する使命を持つと主張し続けたが、その起源を父親の利喜太郎の影響にあるとしている。戦前と異なり、西洋哲学（ハイデガーの実存哲学）を使用し神道の普遍化を試みたことに藤澤の戦後の特徴を見出している。[13] 上西は、「神道の普遍性の開明と世界への発信」は藤澤の主な課題だったと結論する。[14]

藤澤の政治学思想に注目する先行研究として、大谷伸治は、藤澤の西洋思想批判はその完全な否定を意味しないことを指摘し、「藤澤の「日本政治学」は、単にファシズム体制を正当化するために唱えられたとするのは正確ではなく、当時さかんに叫ばれた近代の危機に対する政治学的な処方箋の一つ」と指摘し、日本主義転換後の藤澤思想の中に西洋哲学的な概念の存続を確認している。[15]

藤澤の政治思想を論じる研究として、近年の中井悠貫の論文も注目すべきである。中井は藤澤の民本主義から日本主義への転換を「回帰」として捉え、それに関して、「結論を先取りすれば、その「回帰」は決して単なる大勢順応ではなく、そこには内在性があった」と論じる。[16]中井は、藤澤がもともと戦後のエスペラント運動と国際連盟は、軍国主義や官僚主義が生み出した弱肉強食の世界を克服し永遠の平和を成立してくれると期待していたと述べる。だが、連盟の現実と限度に気づくと、その理想を諦めずに、連盟の理念のための新しい媒体を探し始めた。彼は連盟を日本の国体の構造に見立て、日本国体こそに理想の実現の可能性を見出した。藤澤は一九二八年以降、国体論者筧克彦の表現主義から影響を受け、日本を世界秩序の中心とした「国際表現主義」を唱え始める。この傾向はさらにエスカレートし、日本国体の普遍性を固定化させるために、結局日本を世界万国の祖国として位置付けてしまう。中井は藤澤の最も大きな欠点を、「民族生存」（各民族の独立）を漠然とした「四海同胞主義」の中へ統合してしまったことに見て、藤澤の「回帰」のルーツをこの問題に探っている。

上西は神道に対する信仰の連続性を主張する一方、中井は連盟理念の連続性を強調しているが、両者に共通しているのは、藤澤の思想を内在的に一つの連続した課題として捉え、藤澤における「普遍性」を重視していることにある。つまり、国際主義から日本主義への転換は思想上の根本的な断絶ではなかった。藤澤における内在的な課題を指摘することで、両者は藤澤に関して重要なことを捕まえていると思われるし、私自身は両者の研究から大いに学んでいる。だが、両者が開拓した余地をより発展させる余裕もある。

藤澤をジェネーヴ（国際連盟事務局）の時から知っていた三枝茂智は「回帰」の問題について、「勿論転向という問題ではなく、真理の最高峰を極めようと読書し、努力工夫し、思索し続けるうちに自然に、日本学に到達したものと思われる」と述べている。[17]もちろん、藤澤が海外生活で直接経験したことも注

目すべきだが、[18]「読書」というキーワードが示唆しているように、思想家が何に基づいてその洞察や考察を体系化しようとしているかは重要な問題である。以下では、日本主義への転換期の藤澤はいかなる思想的資源を動員しながら自らの考察を展開したかを検討していきたい。

四、藤澤が見た国際秩序の根本問題

一九二九年、藤澤は『共産主義排撃の根拠』という論文集を刊行し、彼が敵対視していた共産主義に対する批判を展開した。世界の平和は「国際連盟とか司法裁判所の如き国際組織を完成しても、終局的には到底実現されるものではない」と主張する。[19]つまり、もし国際連盟あるいは類似した国際的な機関は健全に機能していても、世界平和は成り立たない。それは何故だろうか。

国際連盟は単にいくつかの国の不正で機能しないのではなく、その構造の中に致命的な欠点を持っていると藤澤は見ていた。この欠点は、「素より国際政治はお互に主権の平等を主張するアトムとしての国家が並存するだけ」である。[20]つまり、問題はそもそも「国家主義」にある。国家主義は国際社会において国家を最高単位とし、各国に自国の利益を優先させている。藤澤はトマス・ホッブスの有名な「万人の万人に対する闘争」を借り、「万国に対する万国の闘」というふうにこのような国際社会を特徴づける。国々は連合して協力しても、それはあくまで利己心を満足させるためである。このようなシステムが最善で得られるのは、「勢力均衡」あるいは「バランス・オブ・パワー」である。だが、各国は最終的に自分のためにしか存在しないので、システム全体が永久的に安定することはない。[21]

近代西欧の国際社会は国民国家を超えた主権組織を知らない「国際無政府状態」である。この状態の中で、各国の自己制限や各国間の社会契約関係以上を期待することはできない。国際連盟に加盟している国々は一定の制限を受けているが、最終的な主権はまだ各加盟国にあるので、そういう意味では、国際連盟はまだ超国家的な組織ではない。[22]

藤澤は、この根本的な問題を解決するためには、各国を超えた主権が必要だと考える。彼はこの主権を「世界主権」と呼ぶ。実はこの国家主権を超えたものに対する期待はすでに一九二〇年の国際民本主義時期の藤澤に確認できる。一九二〇年の論文で、藤澤は「どうしても是から人類は世界国家と云ふ様な一種の社会形式を採用し世界を一丸として生存して行かなければな

くなるだらう」と論じ[23]、主権問題を解決しうる世界国家に対する期待を表現した。

だが、国際連盟はまだ藤澤が期待しているものではなかったが、国際連盟の成立自体は大きな転換を意味していた。一九二九年の論文では、藤澤は次のように書く。

「世界大戦の苦き経験と連盟の成立により各国は次第にその上に位する超国家的なる全人類的超国家社会が実在してゐる事実を認識し初めた。詳言すれば国家なるものは全体たる国際社会の部分としてのみ固有の存在とかちとを有し得る。[24]」

国際連盟の実際の運用は理想に及ばないとしても、藤澤にとって、各国家を超えた全体的な国際共同体に対する意識が生まれつつあることは将来の可能性を示している。実は、理想的な国際社会はすでに存在しているが、欠けているのはそれに対する「認識」である。藤澤にとって、具体的な行政の仕組みより、意識や認識の役割が大きい。

藤澤が問題にしていた世界観は現在の政治学で言えば、古典的な現実主義（リアリズム）の世界観そのものである。[25]だが、藤澤は決してリアリストではなかった。逆に、この世における各闘争を最終的に解決しようとした理想主義者あるいはユートピアンだと言わざるを得ない。彼はいかに主権の壁を破り、アナーキー状態の中から統一された秩序を成立できるかをその最も根本的な課題としていた。

なお、先行研究がすでに指摘している通り、藤澤は日本こそが解決の鍵を握っていると信じていた。それは日本こそは世界主権を体現できると考えていたからである。藤澤が日本のこの使命を日本の国民性と国体に位置付けていたことはすでに指摘されているが、つづいて、この点に関する議論を詳細に分析することによって、藤澤はこの結論にどう辿りついたかを考察したい。

五、形而上学的な秩序の再建

藤澤は帝国九州大学就任中に以上の議論を展開したが、それは完全に独自の考察ではなく、大に西洋哲学を援用しながら行われたものである。藤澤がいつ、どのようなきっかけで、どの思想家や学者に出会ったかを知ることはできないが、帰国後の論文においてドイツの学問が活発に参照されていることは彼の

ベルリン大学での留学と無縁ではないと思われる。[26]

一九二〇年代後半から三〇年代後半まで執筆した論文や書籍において西洋思想の使用が顕著である。エルンスト・トレルチ、エドムンド・フッサール、フランツ・オッペンハイマー、オスワルト・シュペングラー、カール・シュミット、マルティン・ハイデガー、ハンス・ケルゼンなどなど、ドイツを中心として当時の西洋における著名な学者が相次いで登場する。その中で、国際無政府状態の問題を解決しようとした藤澤にとって特に参考となったのは、哲学者マック・シェラー（Max Scheler、一八七四～一九二八）である。藤澤を帝国九州大学の時代から知っていた村上徳太郎は当時の藤澤を「マクスシェラーの心酔者」と呼んだほどである。[27] マックス・シェラーはエドムンド・フッサールの現象学の影響を受け、二十世紀初頭の現象学派の一員として活動した哲学者である。シェラーは形而上学を中心とした哲学を展開し、文化の調和にも大きな関心を示していた。[28]

藤澤におけるシェラー理解を紹介するため、「共産主義排撃の根拠」（一九二九年）という論文を取り上げる。本論文において、藤澤は、シェラーを各現象をありのまま、つまりその本質を認識しようとする現象学の代表者として紹介する。藤澤はシェラー哲学の特徴を、知を労働知（Arbeitswissen）、修養知（Bildungswissen）、解脱知（Erloesungswissen）という三種類に分類したことに見出している。これらの知の間には上下関係が存在しており、解脱知が最上位で、労働知は最下位にある。シェラーによると、近代西洋では、主観的自己認識に基づいた労働知が強力な物質文明を生み出し、その具体的な表現は自然科学である。だが、労働知に偏った近代西洋は技術の面において目覚ましい発展を見た一方、精神現象の考察などのその他の側面を無視するようになってしまった。シェラーは労働知に偏った世界を「環境世界」と呼び、藤澤はそれを次のように描写する。

「日常我々が住んでゐる世界は所謂環境世界（Umwelt）である。それは宛も高き障壁によつて囲まれた場所の如く、其内に在る者は自己の利害に関する問題のみしか目に見えず、之にのみ没頭してゐる。此場合各人は、利益の遂行を目的として相対抗する、限定された個人である。[29]」

だが、この「環境世界」の世界観を放棄し、愛情を持って結合されており、個人の利益を超えた「共同世界観」という心持

になることできれば、世界平和が初めて可能となる。[30]藤澤にとって、このような「価値高き情緒が支配する完全なる共同社会―其処には労働知の外に修養知と解脱知の段階Rangordnungが明瞭に認識される―こそ我々の夢みる理想社会である」[31]。シェラーは藤澤の問題意識に有用な思考の枠組みを与えたといえる。シェラーの環境世界は藤澤が問題視していた国際無政府状態を生み出す構造である。社会における個人と同様、国際社会における国家が最終的な単位であり、それを超える主権はない。[32]問題点をはっきりとさせると同時に、藤澤にとって、シェラーの現象学は主観的な認識に基づいた功利主義を乗り越え、平和をもたらす仕組みへの道も示唆した。シェラーの影響下、藤澤は利益や物質の次元における問題を形而上学的な次元へ移転させることによって国際社会における問題を解決しようとした。藤澤の論文において、現象学こそは人類の意識を統一させる力を持つという期待が現れている。

「今真に哲学的即現象学的或は大乗仏教的に這般の問題を究明するならば其内に現はるゝ各種の対立関係例へば精神的指導者と一般大衆、貴族主義的考察とデモクラシイ的考察、質的な少数と量的な多数が単に相対的なる意義を有するものであって結局はそれが動的な本源的統一に帰一してゐることを悟り得るのである。[33]」

また、この統一は将来において初めて成立するのではなく、実は過去すでに存在していたのである。シェラーによると、この統一的な秩序は十三世紀まで存在しており、当時の哲学も「科学的哲学」ではなく、物の本質を捉えようとした形而上学が支配的であった。つまり、労働知、修養知、解脱知の間の健全な上下関係を保っていた。[34]かつての統一の喪失というテーマに関して、藤澤は一九三〇年の論文でも触れる。藤澤はアメリカ人法学者ウィリアム・フランシス・ローマー（William Francis Roemer）を引用し、ウェストファリア条約締結は「プリンスの宗教は其の支配統治する国土の宗教である」という原則で、キリスト教の統一を政治的に破り、国際無政府状態を生み出したと説明する。[35]このような見解に立ち、藤澤は物質主義、個人主義、資本主義の勢力が破壊した「形而上の世界秩序」を再建する必要を唱える。[36]

六、普遍化する「古神道」

なお、藤澤にとって形而上的な世界秩序の再建は急務であるが、具体的にはどうやって再建すべきであろうか。この関連で、藤澤はシェラーが説いた現象学を日本の「古神道」と結びつけ、日本の役割に注目する。

「最後にシェラーが暗示してゐる様に、欧洲人のあこがれてゐる情緒の哲学〔現象学のこと—引用者注〕は、東洋殊に我日本に於て見事に発達してゐるのであるから、之を系統的に纏めて新しい哲学を創始することは、昭和新日本の偉大なる使命であると信ずる。シェラーの唱へる労働知（西洋思想）修養知（儒教）及解脱知（仏教）は日本に於て生成の誠「古神道」によつて統一調和され渾然たる一大思想たらしんとしつゝある。[37]」

以上の引用文において、西洋が失った統一性はまだ日本で保護されているという認識をうかがうことができる。この見解は藤澤の日本国体に対する理想を裏付ける理論である。中井は藤澤の日本主義への転換について、日本の国民性への注目を指摘し、上西は藤澤の従来の神道信仰を指摘するが、これらとともに、シェラーなどの西洋哲学者におけるアジア認識も関係していたと思われる。藤澤も注目するように、シェラーは行き詰まった西洋文明の救済策として、「東西両文化の総合」を期待していた。[38] 藤澤はシェラーにおける「東洋の伝統思想」に対するシンパシーとそれによる「社会の更新的改良」に対する期待を指摘し、[39] また「マックドゥガル」（心理学者William McDougallのこと）の西洋の二元主義に対して、「東洋の一元主義哲学」こそが人に調和と平和をもたらすという主張を取り上げる。[40] つまり、藤澤は彼が参照した西洋思想の中でもアジアの思想の肯定に出会うことができた。これらの思想における「東洋思想」の評価も藤澤に影響を与えたとしても不思議ではない。

また、以上の引用文で使われている「古神道」という概念は日本人法学者筧克彦（一八七二～一九六一）が提唱した概念である。筧は「表現主義」という名前で独自の国体思想を展開した。筧が唱えた「古神道」は国民の生命力や活力を重視するものであり、天皇は人心を統合し、国家を最も総括的に体現する存在として位置付けられている。[41] シェラーが藤澤の文章上で登場すると同時に筧克彦に対する注目も確認できる。藤澤はシェ

ラーが説いていることは、筧克彦の説と大きく変わらないと主張し、日本の学者は西洋に盲従するのではなく、独特の学問の展開すべきだとを主張する。[42] つまり、藤澤はシェラーと筧の説を同一視しており、藤澤において両説が相互に影響し合っていたと理解できる。中井も指摘するように、一九二八年以降、藤澤は筧の「表現主義」を新しい国際主義の基礎として唱え、「国際表現主義」を唱え始めた。藤澤は世界大戦後の西欧人自身も、従来の個人主義に不満を感じ、そのオルタナティヴを「形而上学的表現哲理」に探求しつつあると述べることで、[43]「国際表現主義」こそが国際社会をより高い次元で統一できるという期待を表す。

もし、日本が表現主義が説く形而上学的な統一性を完全に保護し体現していれば、日本こそは国家主権に悩まされている国際連盟の理念を救済できるという結論にいたっても想像に難くない。こうした国際連盟は国際政治における対立を超越的な立場から解決する能力を持つと藤澤が考え、一九三二年に日本を国際連盟の指導者として構想した。「要は日本がリードする連盟が太平洋国際政治を世界主権の高所より取り扱ひ其根本的解決をはかることである。連盟は日本が之をリードすべきもので、之を徒に敵視することは大間違である。[44]」

なお、一つの問題が残っていた。もしシェラーらが論じるように、かつて形而上学的な統一が存在していたとすれば、それは西洋に限った統一だけであってはならない。日本をシェラーやローマーなどの西洋人学者らが語るストーリーに統合する必要があった。藤澤は日中戦争勃発直前の一九三七年五月に完成した『日本民族の政治哲学』（出版は八月）における議論はこのステップを代表する。本著において、藤澤は「実に日本精神は仏教的なるもの、儒教的なるもの、キリスト教的なるものを内包しつゝ而も之を超越し、彼等の特色を生々発展せしめてゐるのである」と主張し、世界中の各思想を日本精神内に包容する。[45] 日本精神は他の思想を内包するのみならず、藤澤はさらに一歩を進んでこれらの思想の歴史的起源を統一しようとした。

「本来何れの民族もその創成時代に於ては祖先神を唯一の絶対者として進行したものと思ふ。従つて其の当時に於て民族と神とは同質の血液によつて結ばれてゐた。然るに後世に至り、種々不幸なる出来事が起つた為に本来同一の祖神を信奉してきた多くの種族や民族は分裂し闘争し対立するに及んだ。其の結果遂に彼等は共同なる生命の淵源を忘却し帰一する処を見失つて了つたのである。帰るべき「魂の故郷」を喪失した彼等は已

むを得ずして超自然的なる抽象神を想像し之に縋り、せめてもの慰めを得ようとした。[46]」

もちろん、ここで論じられている「本来同一の祖神」は天照大神である。キリスト教、仏教、イスラームなどの他の宗教は二次的な現象として片付けられる。このロジックにしたがって、日本は東西文化の総結合と大調和のみならず、実は各文化文明の起源となっている。この観点の最も進んだ表現は、戦時中、藤澤が日本を万国の祖国として実証的に証明しようとした試みにみられる。一九四二年の『世紀の予言』では、藤澤は聖書や仏典など各宗教の聖典は皇国日本の本質を明かすと主張し、たとえば新約聖書における「この神は凡ての民を一つの血より造り、悉く地の全面に住ませば、予めその時と住む所の界（さかひ）とを定め給へり」という箇所を引き、日本の神話の史実性を主張した。[47]

藤澤は一次世界大戦直後、エスペラントに人類の意識を統一する役割を期待した。彼は近代において人工的に作られた言語を使用して、歴史の新時代を迎えようとした。この進歩的な見解はシェラーや筧などの思想の影響下で復古的な方向へ変化した。人類の精神的な統一を経て現実世界における権力闘争という問題を最終的に解決しようとした救世願望は変わらないままだったが、その方向性が過去へ向かった。過去にあった意識の統一を再建するというならば、この統一を体現する主体が必要となる。著者はこれが日本主義への転換の余地を開いたのではないかと推測する。

七、救世と終末

最後に、以上で概観してきた藤澤の思想的構造に関わるもう一つの問題に注目したい。藤澤の「回帰」がドイツ留学の後で起きたことはシェラーの影響を考えれば重要だと思われる。戦後のドイツは敗戦国として従来の秩序の破壊を経験し、今までの思想の再検討を余儀なくされた。戦間期のドイツは、悲観主義は哲学・思想の一つの大きな流れ（たとえば、シュペングラーやシュミット）として台頭すると同時、各種のユートピア思想と終末思想が流行していた。[48] 藤澤の思想の構造を考える際、この背景を意識することも重要だと思われる。

マックス・シェラーはこの悲観主義を共有せず、世界の大調和に対する待望を失わなかったことは彼の藤澤に対する魅力の一つだったであろう。だが、藤澤の文章においては悲観主義的

な観点も現れている。オスヴァルト・シュペングラー（一八八〇～一九三六）が唱えた「西洋の没落」論は藤澤の思想の重要な基点となっていた。一例を紹介すると、

「これが為めに西欧人は物質や機械の為めに圧迫せられて、其下僕となつて人格的尊厳を失ひつゝある。又絶望的な共産主義運動が起つて闘争本能のみが鋭敏となり、基督教の溢れる様な愛などは何処かに行つてしまつた。シュペングラーの「西洋の没落」とはかゝる現象を指してゐのである。[49]」

シュペングラーが代表するような西洋文明終末論を承認すれば、それは逆に新しい救世主の到来の余地を開く。以上で見たように、藤澤の思想において日本は喪失された世界の統一性を修復する使命を持っているとされている。彼の文章を読むと、メシアニズムに対する強い関心に気づく。たとえば、「世界人類が日本民族に期待するところ」という論文では、藤澤は共産革命以前のロシアに言及する。彼はロシアにおける人類救済に対する使命感に注目し、思想的派閥を問わずに存在する「メシアニズム」を指摘する。ロシアは宗教改革を経験していないのでギリシア正教においてこそキリスト教の「原始的統一」が保たれているというあるロシア人思想家の指摘を紹介し、「以上に述べた露西亞の優れた哲学者の思想には顧みるべきものがある。我々上根の日本人が革命前のロシア文学に大なる共鳴を感ずるのは日露両民族が可なり似てゐるからではあるまいか」とこのような使命感に対する共感を表す。[50] 別の論文では、藤澤は近代西洋哲学では、衝動と良心が現世において常に対立し、神の国においてのみその調和を得ることができると述べた後、日本の国体においてこの融合調和はすでに現世において存在すると主張する。[51] これによって、藤澤は日本の国体を構造的に「神の国」に近づけているといえる。

終末と救済の構造は太平洋戦争勃発後の一九四二年に記された『世紀の予言』においてその最も完成した姿を取る。本書において、藤澤は世界情勢を日本の神話を通じて解説した。彼は天照大神が天岩戸で隠れた後、世の中が闇に包まれ、神々の努力によって天照が再び世の中で現れ、「さばへなす邪神の策謀は悉く破れて、凡てが静謐に帰し、天上の世界は闇黒より光明へと転廻した」という有名なエピソードを語る。つづいて、もう一度暗黒の時代が訪れ、「古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる惟神の大道は、さばへなす異端邪説のために妨げられて、世界万民の仰ぐところとならなかった。」しかし、日独伊枢軸によって近いうちにアメリカとイギリスは敗れ正しい世界

秩序がよみがえる。藤澤はこの出来事を第二の天の岩戸開きと呼ぶ。[52] これは太平洋戦争を背景として激化された終末論であるが、藤澤の思想の形成を考えれば、その種子はすでに二十年代後半に播かれていた。

救済と終末は藤澤の思想の重要な構成要素となっている。この傾向は何に由来するのであろうか。まず、藤澤における終末論の形成に関して指摘しなければならないのは、藤澤が参照したウィリアム・フランシス・ローマーとマックス・シェラーは双方ともカトリック系の思想家として活動していたことである。当時のカトリック復興運動において、宗教改革とウェストファリア条約締結による近代国際システムの誕生はその前に存在していた有機的な調和からの「第二の失楽園」として位置付けられていた。つまり、近代の歴史は堕落の過程として見なされていた。[53] こうした観点に基づき、シェラーはたとえばカトリック教会に宿る信仰の力を使用し、戦後ヨーロッパの秩序を再建することをも図っていた。[54] なお、藤澤はシェラーやローマーの語りを受容するとともに、このカトリック的な枠組みを無意識に受け入れて、藤澤の思想の枠組みの上で堕落と救済（再建）が重要な二極として現れた。葦津珍彦が戦時中藤澤の思想に関して指摘した「ユダヤ的史観」の由来はここにあると思われる。[55]

しかし、藤澤の救世思想はこれだけにさかのぼるものではない。神道による世界救済という使命は筧克彦の思想の中でも検討できるので、筧の思想と藤澤の思想の関係はさらなる考察を必要とする。[56] また、中井は藤澤が一九二一年にエスペラントで書いた興味深い文章を引用し、その中で日本は「精神的救世主」として位置付けられていたと指摘する。[57] すでにこの時点において藤澤に救世思想を確認できるが、現段階では、救世思想や終末論への関心の由来を完全に究明することが困難である。だが、藤澤には初期段階から世界における利権追求による闘争を超越し、永遠の平和をもたらすという願望があった。このユートピア的な目的は、思考を簡単に宗教的な救世思想や終末論の方へ導いたと推測できる。藤澤の救世思想の重要な背景として、当時のヨーロッパにおける終末論の系譜を確認できるため、藤澤の思想を孤立したものではなく、当時存在した他の終末論や救世思想との交流の中から理解する必要性をうかがえる。

八、むすび

以上でみたとおり、藤澤親雄は非常に複雑な人物である。数多くの思想要素の混沌を考えると、彼が一つの思想にどこまでコミットしていたかは疑わしくなる。一九二〇年代後半、彼は日本主義へ回帰したとされているが、これは排外的なアイデンティティーではなかったようである。確かに藤澤にとって神道は単なる思想的手段だけではなく、深い信仰の対象でもあった[58]。しかし、「古神道」への転換後の一九三二年に、藤澤は東京で開催されたバハイ教集会において、致命的な危機に直面している世界でバハイ教創設者バハオラ（一八一七～九二）の教えこそは人類を精神的に統一できると主張した[59]。また、バハイ教との接触は一時的なものではなかったようである。戦後も、GHQが作成した報告書の中で、藤澤はバハイ教の「熱心な信徒」（ardent follower）として描写されている[60]。彼が目指した世界文化の大調和を彼自身の内でも成し遂げようとしたように、彼の中では数多くの思想や信仰が交錯していたという印象を受ける。初期段階から、精神的な統一による人類救済は藤澤の思想の最も大きな特徴と課題として見えてくる。そのために役に立ちそうな思想的資源を総動員しようとした。彼のファシズムや全体主義に対する関心もこの観点から理解すべきではないであろうか。もちろん、これは彼の思想が最終的に日本帝国のアジアや西洋に対する戦争を正当化したという事実と責任を否定しない。

最後に、藤澤は日本における地政学の紹介の上でも注目されている。藤澤が一九二五年にスェーデン人地政学者ルドルフ・チェーレン（Rudolf Kjellén、一八六四～一九二二）の学説を紹介したことは日本の地政学の始まりだとされている[61]。その後の著作は地域と政治の関係を中心とした地政学ではなかったが、クリスティアン・シュパングは藤澤を「地政学的に論じたが、それを著作において明らかにしなかった」人物として特徴づけた[62]。藤澤と地政学の関係を如何に理解すべきであろうか。

近年、欧米の地政学研究では「精神的地政学」（spiritual geopolitics）や「宗教的地政学」（religious geopolitics）という現象に対する注目が増えつつある。たとえば、批判的地政学（critical geopolitics）の創設者であるガローゲ・オ・トゥーホウル（Gearóid Ó Tuathail）は戦間期・冷戦期においてアメリカの著名な地政学者イエズス会神父エドマンド・ウォルシュ（一八八五～一九五六年）を取り上げる論文で、ウォルシュの

地政学思想を特徴づけるため、「地政学は地理的権力政治ではなく、偏在的精神闘争である（Geopolitics is not geographical power politics; it is a omnipresent spiritual struggle.）」という主張を引用する[63]。この理解は世界情勢に深い関心を持ちながら政治的物質的な利益の対立を精神闘争として見なしていた藤澤にも当てはまると思われる。藤澤の中でも、政治学と形而上学的な救世思想は奇妙に反響し合っており、彼が一種の宗教的地政学を展開していたといえる。戦時中、彼の秩序構想はさらに終末論的なストーリーの中で位置付けられ、日本の対外戦争を神話的に正当化しようとした。

以前の拙著では、中国北部における対日協力者の一部に関して、宗教的な政治思想の存在を指摘した[64]。今後は新民会などの対日協力機関や中国人協力者において、藤澤の思想にどのような反響があったかをテーマとし、中国北部の占領体制における宗教の位置付けを究明したい。

（1）酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』（岩波、二〇〇七年）を参照。

（2）大谷栄一『日蓮主義とはなんだったのか』五八七頁を参照。藤澤は当時の日蓮主義を意識していたかどうかは興味深い課題である。少なくとも藤澤家は日蓮宗だったということが知られている。「経歴年譜抄」『創造的日本学』三四五～四九頁を参照。だが、秦郁彦の『日本近現代人物履歴事典』（東京大学出版会、二〇一三年）によると、渡欧出張と国際連盟就任は一九二〇年となっており、帝国九州大学での就任は一九二四年である（四九二～三頁）。

（3）報知新聞社政治部編『大陸の顔』（報知新聞社、一九三八年）によると、藤澤は自ら中国人参加者を招待し、本会議の主な開催者でもあった（二一七頁）。

（4）藤澤親雄『大陸経綸の指導原理―附・世界の動向と皇国日本』（第一出版社、一九三八年）、一五八頁。

（5）「経歴年譜抄」『創造的日本学』（日本文化連合会、一九六四年）三四五～三四九頁。

（6）戦時中の藤澤はインドネシアの知識人と活動家との交流もあったようであるが、その具体的な内容はわからない。Mark Ethan, *Japan's Occupation of Java in the Second World War : A Transnational History*（四四頁）および山室信一『思想課題としてのアジア』（五四七頁）を参照。

（7）たとえば、蝋山正道『日本における近代政治学の発達』（実業之日本社、一九四九年）を参照。

（8）白旗士郎（葦津珍彦）「承詔必謹と神代史観」『公論』一九四三年五月、四四～四五頁。

（9）たとえば、Reto Hofmann, *The Fascist Effect*（二〇一五年）、John Dower War, Without Mercy（一九八六年）、およびChristian W. Spang, *Karl Haushofer und Japan*（二〇一三年）を参照。

（10）その他、藤澤の国民精神文化研究所における活動については今井隆太「国民精神文化研究所における危機の学問的要請と応答の試み」『ソシオサイエンス』七号、二〇〇一年を参照。

(12) 上西亘「藤沢親雄の戦後－戦前・戦後の思想の比較と考察」、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』十一号、二〇一七年、九二頁。
(13) 上西「藤沢親雄の戦後－戦前・戦後の思想の比較と考察」、九七頁以降。
(14) 同書、一二三頁以降。
(15) 大谷伸治「藤澤親雄の「日本政治学」」『研究論集』十一号、二〇一一年、一頁。
(16) 中井悠貴「「国際的民本主義」から「人類の祖国日本」へ—藤澤親雄の国際秩序観—」『立命館大学人文科学研究所紀要』一二九号、二〇二一年、二三〇頁。
(17) 三枝茂智「藤沢博士の思い出」『創造的日本学』、二六二頁。
(18) 藤澤自身も彼の在欧経験について次のように述べる。「私自身も洋行前は非常な西洋崇拝で、何でも彼でもバタ臭かつたが、五年も彼方に滞在し、思ひ切つて西洋の文明を吸収し西洋人と深く交際して、初めて西洋のほんとによい点と共に、又西洋の根本的欠陥が分りだした。」藤澤親雄「日本国体の新しき解釈」『共産主義排撃の根拠』（タイムス出版社、一九二九年）、一〇七頁。
(19) 藤澤親雄「共産主義排撃の根拠」『共産主義排撃の根拠』、一七頁。
(20) 藤澤親雄「社会哲学より見たる日本国体の価値（下）」『日本人及日本』第一七五号、一九二九年五月、四〇頁。
(21) 藤澤親雄「国際主義の基礎観念」『国際知識』第八巻第九号、一九二八年九月、二〇～二一頁。
(22) 藤澤親雄「国際社会本質の考察」『国際知識』第九巻第十一号、一九二九年、三〇～三一頁。
(23) 藤澤親雄「エスペラント運動の意義」『新人』第二十一巻第一号、一九二〇年、七三頁。
(24) 前掲注22、三一頁。
(25) たとえば、ケネス・ニール・ウォルツ『国際政治の理論』（勁草書房、二〇一〇年）を参照。
(26) 残念ながら藤澤がベルリン大学で誰に師事したかは不明だし、彼の名前も日本人留学生調査にも入っていない（Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an der Berliner Universitaet*, OAG、二〇〇二年）。だが、藤澤がよく取り上げる神学者と哲学者エルンスト・トレルチ（Ernst Troeltsch、一八六五～一九二三）は当時ベルリン大学で教授していたので、交流があったとしても不思議ではない。
(27) 村上徳太郎「藤澤さんの思い出」『創造的日本学』、三一一頁。
(28) シェラーについてはたとえば、阿内正弘『マックス・シェラーの時代と思想』一九九五年を参照。
(29) 前掲注19、一一頁。
(30) 同書、一七～一八頁。
(31) 同書、三一頁。
(32) 藤澤が個人主義を近代世界の一つの問題として見なしていた背景はこの議論にあると思われる。
(33) 藤澤親雄「形而上的世界秩序の再建」『法律春秋』第五巻第五号、一九三〇年五月、五九～六〇頁。
(34) 前掲注19、二一頁。
(35) 藤澤親雄「国際政治と王道思想」『外交時報』第五十五巻第五号、一九三〇年一月、三四頁。
(36) 前掲注33、六二頁。
(37) 前掲注19、三九～四〇頁。
(38) 藤澤親雄「世界人類が日本民族に期待するところのもの」『日本の思想的独立へ』、二五頁。シェラーの調和思想に関して、たとえば一九二七年の「調和の世代における人間」亀井・安西 訳「調和の世代における人間」、『シェーラー 著作集』、13、白水社、1977を参照。
(39) 藤澤親雄「マルクス共産主義と日本精神」『日本の思想的独立へ』、

一五七頁。「独逸の哲学者マックス、シェーラーは珍しくも東洋の伝統思想に共鳴し我々の情緒を徹底的に浄化することによりて初めて社会の更新的改良が可能なることを説かんと欲する。」

(40) 前掲注21、二六頁。

(41) 西田彰一『躍動する「国体」筧克彦の思想と活動』（ミネルヴァ書房、二〇二〇年）を参照。

(42) 藤澤親雄「仏蘭西及英吉利国民思想の輪廓」『外交時報』第四十七巻第七号、一九二八年四月、四二頁。筧克彦がドイツで留学し、フッサールとハイデガーに影響を与えたヴィルヘルム・ディルタイのもとで学んだことを考えれば、両者の間に類似性を感じることは偶然ではないだろう。西田彰一、三二一～三頁を参照。また、フッサールの哲学を表現主義と読んでいることは藤澤の中での現象学と表現主義の同一性を表している。この点に関して、前掲注20の八〇頁も参照。

(43) 藤澤親雄「近代西欧文明の内的弱点と我国体の哲学的価値」『日本の思想的独立へ』（先進社、一九三二年）、七頁。

(44) 藤澤親雄「太平洋国際社会に於ける日本の位置」『日本の思想的独立へ』、六六頁。

(45) 藤澤親雄『日本民族の政治哲学』（巌松堂、一九三七年）、八頁。

(46) 同書、一三～四頁。

(47) 藤澤親雄『世紀の予言』、一八四頁。つまり、人間は天照の子孫であること。

(48) たとえば、Klaus Vondung, Die Apokalypse in Deutschland, 1988を参照。

(49) 前掲注42、四三頁。

(50) 藤澤親雄「世界人類が日本民族に期待するところのもの」『日本の思想的独立へ』、二八～三二頁を参照。

(51) 藤澤親雄「世界宗教としての国民主義」『共産主義排撃の根拠』、二〇三頁。

(52) 前掲注47、二三七頁。

(53) Gearóid Ó Tuathail, "Spiritual Geopolitics : Fr. Edmund Walsh and Jesuit anti-communism," in Klaus Dodds and David Atkinson (eds.), *Geopolitical Traditions*2000、一九三頁。

(54) Wolfhart Henckmann, *Max Scheler*, 1998、二七頁。

(55) だが、この場合には正確にキリスト教的史観と呼ぶべきである。

(56) たとえば、筧克彦は「古神道の性質」という論文では、「日本に実現せられたる一心同体の神国を、世界に推し及ぼし、人類全体の本来一心同体たる所以を発揮し、人類全体を泄れなく救済する」と主張している。西田彰一『躍動する「国体」筧克彦の思想と活動』六七頁。

(57) 中井、二三八頁。

(58) 藤澤親雄「父の思出」「藤澤博士追想録」（東京帝国大学理学部数学教室藤澤博士記念会、一九三八年）、一頁。

(59) Fujisawa Chikao, "Why Do I Espouse the Ba'hai Cause?", *The Baha'I Magazine* vol. 23, no. 5, August 1932, 一五五～一五六頁。

(60) GHQ/SCAP Records（RG 331）Box no. 2275 B Fujisawa, Chikao Jan. 1947- Dec. 1949を参照。

(61) 高木彰彦『日本における地政学の受容と展開』（九州大学出版会、令和2年3月）を参照。

(62) 前掲注10、「die zwar geopolitisch argumentiert, dies aber in keinem ihrer Titel expliziert zum Ausdruck gebracht hatten」、五七五頁。

(63) 前掲注53、二〇三頁。

(64) 施陸（エリック・シッケタンツ）「民國時期救劫思想與政治論述—以悟善社與救世新教為」『扶鸞文化與民眾宗教國際學術研討會論文集』（博揚出版社、二〇二〇年）を参照。